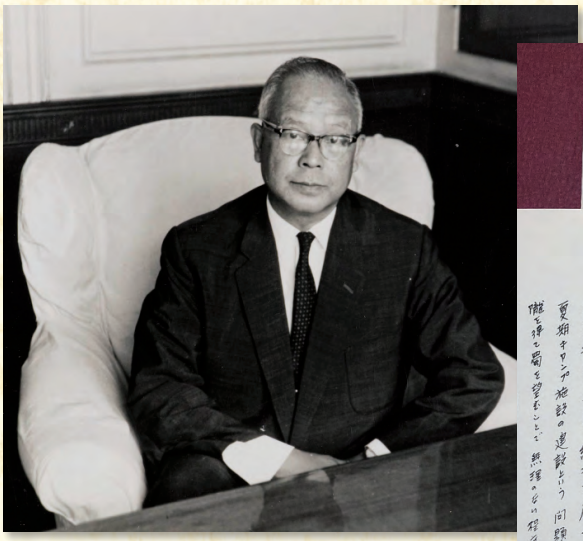
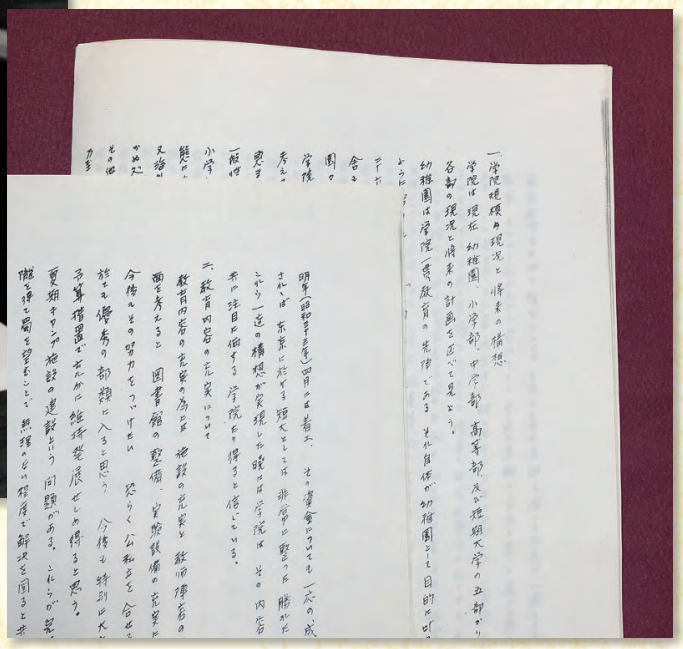
東洋英和女学院
# 史料室だより No.100

2023.5.10 発行
東洋英和女学院
史料室委員会





## 長野 彌院長による将来構想資料　1957（昭和32）年12月下旬

1947年から1972年まで院長を務め、学院の名誉院長であった長野彌先生による資料です。内容は「一、学院規模の現況と将来の構想」「二、教育内容の充実について」「三、学院経営について」「四、教職員　生徒の厚生について」となっています。幼稚園から短期大学にわたる学院各部の発展過程をふまえつつ、社会における東洋英和という学校の在り方を分析し、その未来を構想していった長野先生の思考の軌跡がうかがえる貴重な資料です。（黒川信也元高等部長 寄贈資料）

## 目　次

特　集　長野 彌先生―東洋英和の自立と婦人ミッションへの感謝― …… 2
〈資料紹介〉42　長野 彌院長によるカナダ訪問時のスピーチ原稿（1965年） …… 6
長野 彌先生の思い出　―同窓生からのご寄稿― …… 8
〈東洋英和の先生がた〉10　岡本　幸江先生
よき時代にしあわせに育った者として英和の生命を伝える　町島　由美子 …… 10
140年史の編纂がスタートしています
東洋英和女学院にとっての年史編纂事業　水谷　悟 …… 12
展示案内 …… 14
利用統計／史料室の活動より（2022年10月～2023年３月） …… 15

# 特集　長野 彌先生 ―東洋英和の自立と婦人ミッションへの感謝―

1947年から1972年まで、20年以上の長きにわたり東洋英和の院長を務めた長野彌（わたる）先生が1983年に召天されてから今年は40年目にあたる。今回の特集では、長野先生の学校経営の側面に焦点を当てていく。1950年代後半に生じたカナダ・ミッションとの関係の変化に伴う学校の転機を乗り越え、長野先生がいかにして今日に至る東洋英和の基盤を築き上げていったのかを見ていきたい。

（左から）長野彌院長／外崎長三郎小学部長／マシューソン先生／ダグラス先生／ウェブスター先生（1950年頃）

## 東洋英和への思いがけない就任

長野彌先生は1904（明治37）年2月17日、父忠恕（ちゅうじょ）、母アグリの6男として、山形県新庄市に生まれた。祖父は士族から牧師に転身し、その息子である忠恕もメソジスト派の牧師となり、おもに沖縄で伝道していたが、長野先生が生まれた3か月後に亡くなったという。一家の主を失い、兄弟も多かった長野家の経済状況は厳しく、先生は苦学しながら県立新庄中学校に進学し、兄の援助もあって鹿児島の第七高等学校で学び、1926年に鹿児島教会にて受洗、そののち東京帝国大学理学部物理学科を1932年に卒業する。世界恐慌を受けての昭和恐慌の只中で、長野先生は赤澤元造牧師（東洋英和の役員。日本メソジスト教会監督）の紹介で、1933年4月に東洋英和女学校に就任する。

「私は多くの男の兄弟の末弟として生まれ…（中略）…学校は私の全学歴を通して男子だけの学校で学びましたので、よもや一生を女子校の教師として過ごすことになろうとは夢にも考えたことはありませんでした」と語っているように、当初、長野先生は大変な学校に勤めてしまったと煩悶した。校長であるカナダ人婦人宣教師を筆頭に、教師も在校生も女性ばかりである環境もさることながら、当時の東洋英和は、青年であった長野先生の目には「生徒は少なく、学校の規模は小さく、財政的には幾何（いくばく）かのミッションの援助によって辛うじて運営される程度で、基礎の強固な学校とは思われませんでした」と映っていた。しかし、先生は覚悟を決め、自分の職場は「東洋英和」、信仰生活の修養の場は大学時代から籍を置く「本郷中央教会」、社会奉仕の場は東京YMCAの「野尻学荘」と定め、以後脇目もふらずそれぞれの場において全力を尽くした。本稿では東洋英和での長野先生のお働きに焦点を当てていきたい。

## 激動の戦前・戦中期に降りかかる責任

長野先生が着任した頃の東洋英和は、ウィリアム・メレル・ヴォーリズ設計の新校舎が完成し、1934年には財団法人となり創立50周年を迎え、大きく様変わりする時期にあった。当時の校長はフランシス・ガートルード・ハミルトン先生で、長野先生への指導は非常に厳しかったという。しかし、それは長野先生の資質を見込んでのものだったのだろう。長野先生は就任4年目にして東洋英和女学校の教頭となっている。その年には日中戦争が勃発し、1938年にはミス・ハミルトンに代わって日本人の小野直一氏が校長に就任し、1939年には御真影を奉戴するなど、ミッション・スクールであった東洋英和の日常は戦時体制に組み込まれていった。1939年に学校が「各科主任制」を実施した際に、長野先生は主任代表、高等女学科主任となり、以後、学校現場の実質的な統括は先生に委ねられていく。1941年には太平洋戦争開戦となり、宣教師は帰国、開校以来学校を支えてきたカナダの婦人ミッション

戦時中の長野先生（前列左）。1945年には高等女学校の校長となり、非常時の学校運営の重責を負った。

（Woman's Missionary Society＝WMS）の援助は途絶え、東洋英和は戦時下の困難な学校経営を強いられる。長野先生が「財政的には幾何かのミッションの援助によって辛うじて運営される程度」と評していた学校の経営が、まさに自分の肩にのしかかる事態となったのだ。長野先生は海外ミッションからも学費からも十分な収入が得られない資金繰りにはじまり、在校生・教職員の安全確保、校舎の防護ほか、あらゆる校内の雑務を自らこなしながら戦中の混乱期にあった東洋英和を守り通した。

そして、終戦近くの1945年5月に長野先生は高等女学校校長となり、いよいよ1947年9月には誰もが認める通りに東洋英和女学院初代院長となった。後年、長野先生は学校の長となる重責について「校長ともなりますと、責任は重く、しかも他人からは分かってもらえませんが、そして他人には相談のできない孤独感におそわれますが、それでも、信仰をもって、積極的に仕事を進めて行かねばなりません。一歩間違えば、学校を窮地に陥れてしまいます。精神的、宗教的な中にも、学校運営という立場からは、経済的な問題についても無視することが許されず、正しく賢こく、対処しなければなりません」と語っている。校舎こそ焼けなかったものの、東洋英和の戦後復興の道もまた険しいものだった。

## 戦後復興に不可欠だったカナダからの支援

戦禍で荒廃した日本の救済のために、戦後再び宣教師たちが多数来日し、東洋英和とカナダ合同教会との関係も復活した。危機に瀕した東洋英和の財政運用には婦人ミッションからの援助が不可欠であった。ミッションからの援助は保育専攻部の経営費、運動場の整備、隣地土地買収、1950年に開設した短期大学の経常費、図書館建設・設備補充費などに充てられた。1952年度のミッション援助申請額は65,000ドル（現在の1億6千万円ほどに相当）に上ったという。苦しい財政事情にあっても、東洋英和が着々と学校を発展させていった要素として『東洋英和女学院百年史』は①カナダ・ミッションからの補助、②長野院長の学校経営上の卓見、③1947年以降30年近く東洋英和の後援会長を務めた一万田尚登（日本銀行18代総裁）の存在を挙げている。一万田氏は第二次世界大戦後の日本経済再建期の金融界に君臨し「一万田法王」と称された人物であるが、保護者として東洋英和の復興にも力を発揮した。一万田会長は「教育に当る人に、金の心配はさせない」という信念のもと、長野先生と二人三脚で学院を支えた。

戦後、東洋英和が現在の幼稚園・小学部が建つ東久邇邸跡地を含めた近隣の土地を次々と買収し、1950年には短期大学を開設するなど、新しい校舎群を建設していったことは「史料室だより」No.94の特集で紹介した通りである。その陰には、長野院長と一万田後援会長の必死の募金活動とともに、婦人ミッションからの資金援助があった。私学国庫助成もない時代、多くのキリスト教学校と同様に、海外ミッションからの資金援助は東洋英和にとって重要な収入源であった。

小学部校舎新築献堂記念礼拝（1954年5月7日）。中央の柱の左にはハミルトン先生、柱の右には一万田尚登後援会長、一席おいて長野先生が着席している。

## 婦人ミッションの解散、綱渡りの校舎建築

カナダ合同教会アーカイブズには、カナダ婦人ミッション本部と、日本に滞在していた宣教師との間で交わされた書簡が残されている。1957年前後からは、東洋英和の中高部・短期大学で教えていた宣教師のミルドレッド・マシューソン先生が本国との通信を担当していた。その書簡では随時日本とカナダ双方の状況が報告されていた。

この書簡のやりとりに大きな転機が訪れるのは、1959年6月4日付のカナダからの報告においてである。カナダ合同教会では、結成以来女性だけで運営されてきた婦人ミッション（WMS）を改組し、教会全体の国内・海外宣教事業の運営体制を統合する計画が立てられ、早ければ1962年の実施が目指された。東洋英和にとってそれは、開校前から宣教師派遣とともに資金援助を継続してきた強力な支援母体が解散することを意味していた。

そして、1959年9月3日付の日本からカナダへの報告には、7月にマシューソン先生と長野先生の間で交わされた話し合いが報告されている。長野先生が東洋英和の短期大学の建築事業への資金援助を頼んだが、マシューソン先生が資金提供はできるかどうかわからないと告げたところ、長野先生は「承知いたしました。私たちはカナダからの援助を75年近くにわたって受けてきましたが、自立する時が来たのですね。今では、カナダからの年ごとの資金援助は〔学院の〕総予算の5パーセント以下に過ぎません。昔よりのご厚意に大変感謝しています。もちろん建築費用について〔カナダの〕人々が援助してくれることを願いますが、もしそれが不可能であれば、どうにかして資金繰りをいたします。借金の返済には時間がかかりますが、少しずつやっていけるようにいたします」と回答したという。とはいえ、その後のマシューソン先生からの書簡には、多額の建築費用の負担はいまだ東洋英和には重荷であるとして、カナダからの援助が要請されている記載があるなど、ミッションからの経済的独立を東洋英和は即座には確立できたわけではなかった。

そうしている間にもカナダ側の組織改編への動きは進み、1959年10月22日付のカナダから日本への書簡には、1960年から1962年の間の婦人ミッションの財源の確保は不確実であり、宣教事業の統合が予定されること、そして、それが実現してしまう前に東洋英和、山梨英和、静岡英和への多額の資金援助は終了してしまいたい意向が記される。さらに、カナダ合同教会は、順調に経済復興している日本ではなく、より援助を必要としている国や地域へ援助をシフトする意向を示すようになっていた。

そして、いよいよ1961年5月23日からカナダで最後の婦人ミッション中央本部総会が開催される。そこでは約160万ドルにおよぶ1960年の婦人ミッションの総収益の報告や、統合後の組織改編への最終承認、宣教師についての調整方針の承認、婦人ミッション資産の教会内の別部署への分配、400人に及ぶスタッフの異動などが協議された。そして、日本への新しい宣教師の指名とともに1961年の資金援助として静岡英和へ11,000ドル、東洋英和へ60,000ドル、国際基督教大学（ICU）のカナダ・ハウスへ20,000ドル、富里ナーサリースクールへ4,000ドルという、建築費用のための予算が計上された。通常よりも多額のこれらの援助は、婦人ミッションからの最後の贈り物のようなものであった。約80年にわたり東洋英和を支えてきた婦人ミッションは1961年12月31日にその役目を終える。

## 伝道、教育、経営は、自らの手で

こうした難局を長野先生はどう乗り越えたのか。長野先生の多年にわたる功績に対して『東洋英和女学院百年史』では長野先生についての記載が少ない。史料室には『百年史』を制作する際の編纂委員からの要請に対する長野先生の返信が保管されている。そこには「私は悠久な人類の歴史の中で小さく、名もなく、無力で、たゞこの世に生まれ、精一杯生きぬき、やがて天に召され、地上にはなんの痕跡さえも残らない人間が何億とありますが〔、〕そのような人々がその時代を形成していたのだと考えております」と書かれ、長野先生は自らもそうした人間の一人として、ご自分の業績を語ることを固辞した。『百年史』が十分に長野先生の功績を語り切れていないのには、こうした事情もあったようだ。

しかし、短期大学保育部会（保育科の同窓会）名誉会長の郷司富士子氏は回想記事において「長野院長は、カナダ・ミッションから『あなた方の伝道、教育、経営は、自らの手でなさい』というお達しを受け、自給自足の最初の開拓者として選ばれた方でした」と証言している。ミッションからの支援が無

くなった時に、長野先生が奔走し、日本人自らの手で寄付金を募集したこと、校舎新築に当っては後援会を中心にして学債を発行し、母の会ではバザーを開くなどして寄付を募ったという。東洋英和の経済的自立はあらゆる手段を用いて画策されていった。長野先生は、1960年には静岡英和の広瀬修造理事長が交通事故死したため静岡英和の理事長に、1962年には山梨英和の内藤正隆院長が急逝したため1963年4月に山梨英和の理事長にも就任し、三英和にわたる学校経営の重責も負っていた。長野先生が卒業生の中里昭子氏への手紙において「戦後の二十数年、血みどろの苦労を重ねて来ました」と強い表現で述べているように、東洋英和の自立への道のりは、決して平坦ではなかった。

そして、1962年10月23日付の長野先生からカナダへの書簡には、多額の援助を要した校舎群建設の最終工事であった中学部新校舎の完成が近いことが報告され、物心にわたるカナダの人々からの援助への深謝が語られている。さらに1963年9月27日に長野先生は、来年には東洋英和は創立80周年となり、「婦人ミッションが我々の学校と我々の国にもたらしたものがいかに偉大な祝福であったかを、新しいやり方で具現化していきます。あなたがたの精神が今ここにおられる〔宣教師の〕先生がた、そしてこれから〔わが校に〕いらっしゃる先生がたによって引き継がれていくことに感謝申し上げます」とカナダに伝えている。そうして迎えた東洋英和の創立80周年がいかに盛大なものであったのかは「史料室だより」No.94で紹介した通りである。その時点で婦人ミッションはもはや存在していなかったが、東洋英和は幾多の苦難を経てようやく80年目にして自立を果たそうとしていた。創立80周年に込められた思いは大きかった。そして、翌1965年に敢行されたのが長野院長によるカナダ訪問であった。

## カナダ訪問　婦人ミッションへの感謝

ヨーロッパとアメリカ訪問ののち、1965年9月4日から長野先生はカナダのトロントに入り、2週間にわたって、かつて東洋英和、静岡英和、山梨英和のために奉職し、今や老齢に達している元婦人宣教師たち約25名をカナダ各地に訪ねた。さらに、カナダ合同教会の世界宣教部を訪れ、学院を代表してスピーチを行った。その内容については本号の「資料紹介」（6～7頁）を参照されたい。

その旅の帰路において、長野先生が当時の同窓会長塩原千代氏と役員の村岡花子氏宛に投函した手紙には、引退した宣教師たちがミッションより年金を受給し、環境の良いところで安楽に余生を送っており、あまり困るような人がいなかったので、大変安心しうれしく思ったと書かれている。婦人ミッションが解散してしまったのち、かつての宣教師たちが安泰に老後を過ごしているのかを長野先生は見届け、人生の多くの歳月を英和のために捧げた先生がた一人ひとりにお礼を述べたのだった。カナダ訪問の大役を果たし、長野先生は9月30日に帰国した。

欧州・米国・カナダ歴訪帰国歓迎会で報告を行う長野先生（1965年10月25日）

## おわりに

東洋英和の自立は、婦人ミッションによる宣教の当初からの目標であった。婦人宣教師たちが蒔いた女子教育の小さな種が育ち、ミッションの助けなしに学校が自分たちの力だけで歩み、やがてはキリスト教信仰を広めていく担い手となることを婦人宣教師たちは願った。長野先生は、そうした婦人宣教師たちの思いを受け、学院が80年を迎える時までにそれが実現するよう全力を尽くした。長野先生のカナダ訪問について、ある卒業生は「宣教師から受けた恩義に対し、礼節を尽くして返礼する。実に、長野先生は武士のような精神を持った方でした」と評した。

学院の140周年を前に、改めて長野先生のご献身に感謝したい。

※この記事の一部は、『キリスト教史学』第74集（2020年）所収の論文「1960年代におけるカナダ合同教会の組織改編と宣教の変容」に掲載したものである。

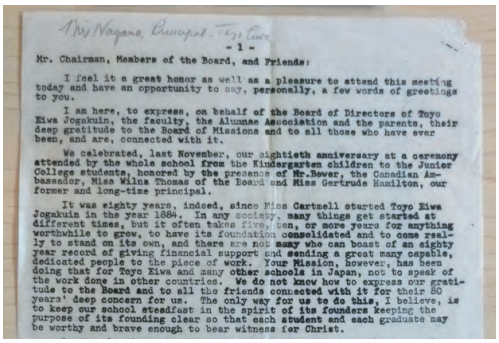
松本　郁子（法人事務局史料室・史料室委員）

# 〈資料紹介〉42　長野 彌院長によるカナダ訪問時のスピーチ原稿（1965年）

今回の資料紹介では、本号の特集で言及されている長野彌院長の1965年のカナダ訪問時の資料について紹介する。

カナダ合同教会アーカイブズ（トロント）には一連の長野院長のカナダ訪問の記録が残されており、訪問日程後半の9月17日にカナダ合同教会の世界宣教部幹部会にて行ったスピーチ原稿も含まれている。このスピーチ原稿の抜粋は、かつて敬和会[注]発行の会報「敬和会」No.38（1983年7月）に、「みことばと共に憶う『長野彌先生』／先生のご遺稿－東洋英和女学院創立八十周年（1964）に当って、カナダミッション当局に御礼のご挨拶を申しのべられた時の草稿。（抜粋）」と題して掲載されたが、カナダ・ミッションへの長野先生の深い思いをうかがわせる貴重な資料であるため、今号にて全訳文を掲載する。（日本語訳、〔　〕内は史料室による）

注：敬和会とは、中高部母の会のOGたちによる聖書研究を目的とする有志の会


Mr. Nagano, Principal, Toyo Eiwa

- 1 -

Mr. Chairman, Members of the Board, and Friends:

I feel it a great honor as well as a pleasure to attend this meeting today and have an opportunity to say, personally, a few words of greetings to you.

I am here, to express, on behalf of the Board of Directors of Toyo Eiwa Jogakuin, the faculty, the Alumnae Association and the parents, their deep gratitude to the Board of Missions and to all those who have ever been, and are, connected with it.

We celebrated, last November, our eightieth anniversary at a ceremony attended by the whole school from the Kindergarten children to the Junior College students, honored by the presence of Mr.Bower, the Canadian Ambassador, Miss Wilna Thomas of the Board and Miss Gertrude Hamilton, our former and long-time principal.

It was eighty years, indeed, since Miss Cartmell started Toyo Eiwa Jogakuin in the year 1884. In any society, many things get started at different times, but it often takes five, ten, or more years for anything worthwhile to grow, to have its foundation consolidated and to come really to stand on its own, and there are not many who can boast of an eighty year record of giving financial support and sending a great many capable, dedicated people to the piece of work. Your Mission, however, has been doing that for Toyo Eiwa and many other schools in Japan, not to speak of the work done in other countries. We do not know how to express our gratitude to the Board and to all the friends connected with it for their 80 years' deep concern for us. The only way for us to do this, I believe, is to keep our school steadfast in the spirit of its founders keeping the purpose of its founding clear so that each student and each graduate may be worthy and brave enough to bear witness for Christ.

United Church of Canada Archives, Fond503, Series11, Acc.83.014c, Box16, File420. Board of World Mission, Japan 1965, Correspondence: Visit to Toronto of Principal of Toyo Eiwa, Mr. Nagano.

**〔カナダ合同教会世界宣教部幹部会における長野彌院長による謝辞**（1965年9月17日）〕

議長殿、部局員各位、そして同志の方がたへ

本日この会合に参加し、皆様への謝辞を直々に申し述べる機会をいただいた喜びとともに大いなる名誉を感じております。私は、東洋英和女学院の理事会、教職員、同窓会と保護者を代表し、〔カナダ合同教会の〕宣教部と、そこに過去から現在に至るまでの間に関係した方がたへの、私ども一同の感謝をお伝えするためにここにおります。

昨年の11月に、私どもは幼稚園児から短期大学の学生に至るまでの全在校生の出席のもと創立80周年の式典を祝い、来賓であるカナダ大使バウアー氏と〔世界宣教〕部代表のミス・ウィルナー・トマス、長期にわたり〔東洋英和女学校の〕校長を務められたミス・ガートルード・ハミルトンのご臨席を賜りました。

1884年にミス・カートメルが学院を創設してから、まさに、80年が過ぎました。どのような組織体でも、多くのことがさまざまな時期に始まりますが、価値あることが芽生え、組織の基盤が確立し、真に自分たち自身で自立していくためには5年、10年、もしくはさらなる年月がかかりますうえに、困難な仕事を行うために資金援助と有能で熱意ある多くの方がたを送り出した80年にわたる功績を誇る組織もなかなか存在しません。しかしながら貴方がたのミッションは、ほかの国々での事業はさておき、東洋英和と日本の多くの学校のためにそれを成し続けてきました。私どもへ80年にわたる深い配慮を寄せられた〔宣教〕部とそこに連なるすべてのご朋輩への感謝は筆舌に尽くし難いものがございます。私が思いますところ、私どもの謝意を表明するためにはただひたすら、各々の生徒や学生を、キリストの証人として十分ふさわしく立派に育てていけるように、学校創設の目的を揺らぐことなく保持していた創設者たちの精神に忠実に、私どもの学校を維持していくしかありません。

すでにご存知のように、私どもの学校は5つの部を有しており、すなわち、幼稚園、小学部、中学部、高等部、短期大学があります。幼稚園には4クラス80名の園児がおり、小学部には12クラス530名、中高部にはそれぞれ12クラスで600人、短期大学の英文科と保育科には6クラス350人の学生が在籍しています。英語の専攻科もあり、全校で2,200名の学生や生徒たちが在籍しています。私どもは年間を通じて宗教教育に重きを置いており、教職員の選考にも大きな注意を払っております。我が校は社会において素晴らしい名声を博しており、それが継続していくことを私どもは望んでおりますが、それと同時に学校の優良性と高貴な精神を保つことに最善を尽くしています。そのことは、奉仕と犠牲を捧げてくださったミッションボードとその素晴らしい校長先生や先生がたによって支えられてきた学校の精神と伝統に多くを拠っていることで可能だと考えております。日本人教職員の間においても優れた働き手が不足することもなく―その人たちは卒業生であったり、そうでなかったりするのですが―彼らは奉仕の精神に満たされ、キリスト教教育の展望と女子への愛情によって突き動かされてきた人々であり、過去においても現在においても最善を尽くしてくださいました。

ここで少し私事につきまして申し上げますことをお許し願います。私はメソジストの牧師の息子として生まれ、1928年に東京帝国大学に入学し、それと同時に現在の本郷中央教会、かつての中央会堂の教会員に加わりましたが、その教会はカナダ・メソ

ジスト教会と深い関わりがあります。当時における私の恩師かつ友人は、アームストロング師、ヘニガー博士、オルブライト師で、いずれの方がたからも私は多大な影響を受けました。バット博士とストーン師もよき友人たちでした。私はこの教会の会計係を1933年から務めました。この本郷中央教会はキリスト教の普及において卓越した中心地でしたが、ほとんどの教会員が学生だったために財政的には大きな困難を抱えておりました。しかしながら、それはリーダー的な教会のひとつとなり、現在においては日本のなかの小さな教会を援助することも可能なほどになっています。私どもの武藤健牧師は戦後の最も困難な時期において日本基督教団の総会議長を二期務め、その基盤を強固なものにしました。彼は任期中にカナダを訪れています。

私は学生時代、アームストロング師の監督のもとに寮で暮らし、あの方が教会の献堂式の晩に病で亡くなるまで、教会を安泰なものにしていくのを直に見てきました。あの方ご自身とその生涯は私に多大な影響を及ぼし、私の人生の指針を決定づけました。大学卒業後、教会で少しの期間働いたのち、赤澤〔元造〕監督の推薦により教師となり、ミス・ハミルトンのもと東洋英和で働くことになり、以来32年間在職しております。戦争の終わり近くの1944年、理事会は私に校長になることを委嘱しました。私は責任が自分には重すぎると思いましたが、首都〔東京〕からほとんどの人々が疎開してしまったような状況で適切な人物を見つけ出すのは困難であったため、私はその命を受けなければならないと考えました。戦争が終わるとすぐに貴方がたの宣教部は、私どもの旧友である宣教師の方がたを我々のもとに送り返してくださいました。それらの方がたは、婦人ミッション代表のミス・コーテス、ミス・ローク、ミス・マシューソン、ミス・ダグラス、ミス・ハミルトン、ミス・スクルトン、ストーン夫人、ミス・サンダース、ミス・サティ、そして学校を支えてくれた多くのお若い先生がたでした。学校全体の生徒数が100にも満たず、あらゆる困難が私どもを取り巻いている時に、これらの方がたの存在が私どもにとってどれだけ大事であったかは言葉に尽くせません。80年前の学校創設以来、カナダ人宣教師の方がたが偉大な業績を成してきたことは真実でありますが、私どもが新しい時代を切り開こうともがいている困難の時に、学校の再建のため、これらの友人たちは私どもに寄り添ってくださいました。こうした事実と、彼女たちを通じて貴方がたが成してくださったことの意義は、学校の歴史と並んで日本の教育史においても忘却されてはならないことは、強調し過ぎてもし過ぎることはありません。

私どもの校舎は〔戦災を免れ〕破壊されず、無傷ではありましたが、私どもはすぐに校地と校舎を拡張しなければならない問題に直面しなければなりませんでした。この計画において、再びミッションボードは、あらゆる筋からのさまざまな要求や依頼があったに違いないなかで、惜しみなく私どもを支援してくださいました。想像した以上の土地と建物に恵まれ、私どもはそれらをキリスト教教育という目的に活用することを強く望んでおります。現在、我々は学校拡張のために巨額の借金を抱えておりますが、近い将来それを返済していく明確な計画を有しておりますゆえ、そのうちにこういった類の負担なしに教育の業（わざ）を遂行していくことが可能になるでしょう。いずれにせよ、私どもは貴方がたが惜しみなく与えてくださることに、あまりにも多く、あまりにも長く、依存してきたことを痛感しております。この機において、私は過去における貴方がたの全ての援助について、再び衷心より感謝申し上げると同時に、将来においてはこれ以上の財政的支援をお断りし、その支援をほかの用途に使っていただきたいという意向をお伝えしなければなりません。

しかしながら、私どもは宣教師を派遣し続けることを貴方がたにお願いしたく思います。貴方がたとの人的な関係性を保っていくことは私どもにとって最も重要なことなのです。人格の優れた宣教師の先生がたを招くための財政的な負担を請け負うことを私どもはむしろ喜んでおり、そのことが可能であると思っております。

私どもの学校は、貴方がたのミッションボードの婦人たちにあまりにも多くを負ってきましたが、それと並んで学校の理事としてご尽力くださった男性たちにも感謝申し上げたく存じます。プライス師、バット博士、ストーン師はいず方も建設的なご意見をくださった有能なメンバーでありました。個人的にも、私はこれらの方がたから多くの恩恵を蒙ってまいりました。前述いたしましたアームストロング師とともにこの方がたは、文字通り、私どもの国のために命を捧げ、我らの主の教えの生きた模範となりました。

ここ数年、私は山梨英和と静岡英和の理事長を務めてまいりました。これらの学校からも深く感謝を伝えてほしいと頼まれました。両校はともに、それぞれの地域社会においてよき働きを行っており、要望に応えるため短期大学の設置を計画しております。来春には両校がそれを実現できることは確実だと思われます。そして、これら両校が10年以内かそれぐらいのうちに完全に自分たちで自立することも、疑いの余地がありませんが、それまでは、貴方がたがもう少しの間、これらの学校への援助を継続してくださいましたら幸いです。

神の祝福が貴方がたと貴方がたのお働きのうえにありますように心より祈念いたしまして、私の挨拶を終わらせていただきたいと存じます。ご清聴ありがとうございました。

長野 彌

# 長野 彌先生の思い出 ―同窓生からのご寄稿―

「史料室だより」前号で募集しましたところ、長野先生についての数多くのエピソードが寄せられました。ご寄稿くださった皆様に心より感謝申し上げます。

**戦時中の出来事　　長野先生をお慕いして**

1945年高等女学科卒　栗原たつ子

私が東洋英和の女学科を卒業したのは、終戦の年の3月10日に大空襲で東京が焼野原になった後の27日でした。家が全焼してしまったと泣き笑いで告げるクラスメートもいました。そのような中で私達の卒業証書を制作していた会社が焼けてしまったのです。それで急遽、長野教頭（当時）先生が藁半紙に手書き手刷りで卒業証書を作って下さいました。それは大事な宝物、今でも大切に保管しています。長野先生から直接授業を受けたことはありませんでしたが、何時も私達を暖かく見守って下さるお父様のような存在でした。

**昭和30年頃　　長野先生の辛口甘口エピソード（談）**

1960年高等部卒　小谷美智子

・当時、自分で収入を得る女性はほんの少数で、ご主人が財布の紐を握っていたので、なかなか寄付が集まらないことを「女子校の悲哀」であると嘆いていらっしゃった。
・長野先生はご自分から生徒に飛び込んでいくタイプの先生。院長室も、職員室も開けっぱなしで、小学部の児童など「院長先生～！！」と飛びついていった。先生もニコニコと嬉しそうに迎え入れていらっしゃった。
・常々、成績はともかく真面目に学校に通っている生徒については、一度英和で引き受けた以上、きちんと育て上げるべきとおっしゃっていた。

**毎週月曜日の中高部礼拝のお話から　　私の生きる指針となった長野院長先生**

1966年高等部卒　岡田苑子

・「今日、文部省の人が来ます。毎年のことですが、こんなに授業時間が少なくては、各種学校に格下げします！と言われます。土曜日も休みで、こんなに長い夏休みや、まして秋休みなんてあって冬や春の休みも極端に長過ぎるし、英語の時間数迄も全然足りない！と叱られます」とニコニコしながらお話しされました。「みなさん！　土曜日も来たいですか？」私達「やだ～！」「ハイ！　分かりました。そう言っておきます」と笑っておっしゃいました。
・「みなさんのお父様のお仕事の関係で、経済的にお月謝を払うのに問題が起きたら、躊躇せず申し出て下さい。決して、退学する様な事は考えないで下さい。そして卒業した後いつの日か、立派に自立した姿で学校に訪ねて来て下さい。最初はお月謝の全額では無くとも、ともかく元気な姿を見せて下さい」と、お話しされました。長野先生らしいお考えだと思った次第です。
・「あるご父兄がヤシの木をご寄付下さる事になりました。お山（旧校舎当時の木々に囲まれた私達の密やかな憩いの場所）に植えようと思います。大事にしましょう」と、おっしゃいました。長野先生は野尻を愛し、自然を愛する心を育みたいと、お山の小路にさりげなく四季折々のお花を植えて下さいました。お山のベンチでの友人との語らいは、心に残るものばかりです。

**文化祭、修学旅行　　長野先生の思い出二点**

1968年高等部卒　笠井章代

・一つは私が中2の時、演劇部に所属していて11月の文化祭で病気の母親役をやることになりました。大講堂近くの廊下で誰も居ないのを確認して、咳の練習をしていました。そこに何と長野院長が通りかかられて、「ずいぶん酷い咳のようだね」と仰いました。私は慌てて「いえ、劇の練習していました」と申し上げると、一瞬後に「あぁそうか、劇の練習か」と笑っていらっしゃいました。
・二つ目は中3の修学旅行の時です。ちょうど東京オリンピックの時で初めて東海道新幹線で関西に行きました。薬師寺の高田好胤さんのお話なども印象深かったのですが、苔寺(西芳寺)に行った時のこと。幾つものお寺を訪問して少し厭きていた生徒達は早足で通り過ぎていたのですが、長野院長が誰にともなく「皆こういう所を見なくちゃいけないんだよ。これは枯山水と言ってね…」。通り過ぎて行った皆を呼び戻したい気持ちでした。たまたま居合わせた私は苔寺の枯山水の事をずっと忘れる事はありませんでした。
長野先生は尊敬する先生でしたが、その先生の心温まる思い出です。

## 野尻にて　　長野先生の強烈な思い出

1966年高等部卒　石榑恭子

60年前の野尻湖のキャンプのことです。当時中3か中2で、お汁粉（足がつくところで水がお汁粉のように濁るため）と呼ばれていた初心者の岸に近いところで三谷先生の指導を受けていました。そこにナガポン〔長野先生〕が小さい手漕ぎボートに蕗を山のように積んでお帰りになりました。そのあとはどうなったか全く記憶はないのですが、夕食に蕗の甘辛油いためが出て、院長先生がとってきて下さいました、と説明があったように覚えています。学校では院長先生は遠い存在でしたが、こんなこともなさるんだ！と意外に思ったり、父親が食料を調達してきてくれたような家庭、家族を感じ、ふわっと温かい気持ちになり、ぐっと英和の輪に入れた嬉しい安らかな気持ちになりました。

## 本郷中央教会幼稚園の園長として　　N先生の思い出

（荒川区教育委員会発行「教育時報あらかわ」69、1984年3月より抜粋／一部修正）

1969年短期大学保育科卒　赤熊吉子

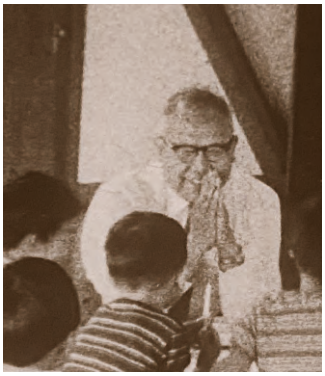
私の卒業した短大は明治17年に創立された基督教主義の学校で、戦前はカナダの宣教師によって運営されていたが、戦後の荒廃の中から学校を復興し現在までの道をひらかれたのが、N先生〔長野先生〕だった。私が学生時代にN先生と直接お会いしたのは、通学路の途中であったり、校内の廊下ぐらいで強いて面と向かってと言えるのは卒業証書を手にした時ぐらいであった。背が高く凛とした学長だった。

卒業後すぐ就職しN先生を思い出すこともなかったのであるが、人の出会いというものは不思議なもので、六年後、今度は職場の上司として、N先生に再会したのだった。N先生は学長時代からずっと幼稚園の園長として自ら幼児教育に携わっておられたことをこの時初めて知った。古い教会の小さな幼稚園であったが、私達教師を信頼し保育についていっさい口を出さない園長だった。エピソードはいくつもあるが、先生のお人柄を偲ぶものとして私の心に深く残るものがある。

N先生は普段はほとんど幼稚園にいらっしゃることはなかったが、行事の時には必ず出席し、私達教師以上にこまごまと気を配って裏方をやってくださるのだった。ある時、卒園を間近にした年長児と一緒にお弁当を食べて下さいとお願いしたところ、何かご多忙中のようだったが、「はい、幼稚園の先生のご命令とあれば必ず伺います。どうぞよろしく。」とのご返事。そして当日は、奥様手作りのお弁当持参で大きな体を幼児用のイスにおろされた。早速好奇心旺盛な幼児は、園長先生のお弁当をのぞいて、「センセイのお弁当、だれが作ったの？」「おいしそうでしょう？　これはね、私のお嫁さんが作ってくれたんですよ。とってもおいしいお弁当なんだよ。」と茶目気たっぷりに答えられた。そして「赤熊先生はたくさん本を読んでくれますか？歌を歌ってくれますか？」と幼児に問いかけられたりした。

N先生の幼稚園に就職して六年後、私は退職することになるのだが、この時も良きアドバイザーとして相談にのってくださった。ご自身の体験談を話され、自分の歩む道などというものは簡単に決められるものではない、その時は迷い悩んだとしても、無駄であったということは一つもないはずだと励まされ、寄り道をする決心をしたのだった。

社会的活動の場や学校においてはたいへん厳しい立派な方という印象が強いようだが、私個人にとっては本当に尊敬すべき素晴らしい上司であった。寄り道しながら結局幼稚園にもどったことを報告しなくては、と思っているうちに、先生の訃報が届きただ呆然とするばかりだった。他者に対する以上にご自身に厳しく、決断が早く、まず実行なさるN先生の不肖の弟子と自認する私であるが、嗚呼、現実は程遠く、弟子返上の今日この頃である。



## 〈東洋英和の先生がた〉10　岡本　幸江 先生

# よき時代にしあわせに育った者として英和の生命を伝える

### 古きよき時代の英和生として

岡本幸江先生は1929（昭和4）年、東洋英和の小学科五年に編入、1936（昭和11）年高等女学科卒。「午どし多数とじゃじゃ馬揃いと、それに馬齢を重ね……の意をかけて、今は亡い鵜沼〔幸（さき）〕先生に命名していただいた」馬齢会という学年会について『東光　東洋英和女学院創立百周年記念』（東光会、1984年）に次のように記している。「品格優れたあの本館〔旧ヴォーリズ校舎〕に移ったのが三年のときで、階段の手摺を滑り下りるのがはやったり、五年生と喧嘩してかんしゃく玉を持って相手の教室に攻め込んだ人達もあったりしたが、五年の時には学年総力をあげてバザーを開催してかなりの収益を学校に寄付し、長野〔彌〕先生がこれを基に野尻湖宮沢のキャンプ用地を購入なさった。（中略）鵜沼、新井〔竹〕両先生は勿論持ち上りで、私達はお二人に可愛がられ、仕込まれ、しつけられ（どれも本気だったなあ！）、よき時代にしあわせに育った」

旧木造校舎での寄宿舎生活も経験。舎監の加茂令子先生や文芸会について東光会会報「東光」第3号（1957年12月）などに記している。古きよき時代の英和の香りの中で育った思春期であった。

### 生徒のロールモデルとして

多くの卒業生が岡本先生を「お姿もお声も雅でエレガント」「素敵で憧れの存在」と評し、時に厳しく立ち居振る舞いのご指導を受けたと言う。言葉づかいにも厳しく、「ごめんなさい」と謝った生徒が「申し訳ございません」と謝るまで終礼をしなかったこともあった。板書や試験問題の美しい文字も含め、岡本先生は品格の体現者であった。

一方、卒業生はお茶目で好奇心旺盛、いろいろなことを面白がる先生の姿も覚えている。野尻キャンプで卒業生リーダー養成に尽力したことは『野尻キャンプサイト50周年記念誌』に詳しい。知的でありながら洒脱な先生の姿は生徒たちのロールモデルであった。

### 悲しみを深く知る者として

岡本先生の最後の担任学年の高三修養会文集『心をこめて生きる　1976年度高三修養会』に、「誰にも話さなかったこと」と題し、七歳で亡くなった長女について次のように記している。

> 無邪気な素直な子であった。戦後の苦しい時期に育ち、主張することよりは我慢することを幼くして身につけて居たが、その無邪気な性質故に、少女時代も青春時代も自分なりの幸福をみつけることが出来たろう。その「将来」が突然彼女から奪い去られたのである。それは不可抗力であったか――否、と私は思う。その責は私にあるのだ、と。（中略）そして恐らくこれをきっかけに、いつの間にか、「あの子の短い一生を、祝福されたものとして感謝することが出来ない限り、自分は信仰に入れないだろう」という思いが私の内に根を下したようである。

しかし、この文章の約一年後の1977年クリスマスに岡本先生は受洗。英和での教員生活の終わりでもあり、時が満ちての受洗であったのかもしれない。「その心の奥には悲しみがどっかりと居座っていたことを家族はよく知っていた。六歳か七歳の頃に急死した長女、直子さんのこと。その後はずっと余生と聞いたこともある。通叔父（とおる）〔岡本先生のご主人〕が2004年に女化（おなばけ）の墓地に埋葬される時に、ようやく直子の遺骨を手元から離して叔父のと並べて置いた」と砧教会の「砧だより」第97号（2015年5月31日発行「岡本幸江叔母のこぼれ話」）にある。

ところで、岡本先生による鵜沼先生への弔辞（「東光」No.14、1977年7月）には「先生は一面、悲しみ悩む者を深く御心にかけられました。（中略）先生は深い深い淋しさを胸に抱いて居られた、それは、誰ものぞき見得ない心の奥で、先生が長い年月、珠の様に大切に抱き続けて来られた淋しさ……」とあるが、鵜沼先生がお嬢様を亡くされたことを自身と重ね合わせていたとも思われる。岡本先生は、生徒や卒業生の苦しみ悲しみに敏感であった。

## 国語教育・生徒指導の継承者として

岡本先生を語る上で、鵜沼幸先生の存在は欠かせない。本稿で何度も登場する鵜沼先生は、岡本先生在学中の恩師であり、教員時代は国語科の同僚でもあった。「東光」No.16（1979年7月）で「自分が好きだからということばかりでなく、鵜沼先生の国語は面白かったし、四季折々の風物に目を留める心用意や人に対する心配りなど、情緒面の教育には国語科の働きが大きかったと思う」とあるが、これは岡本先生の授業とも重なる。現国では考えさせられることや発言を求められることが多く、古文や文学史は大学の教養課程レベルだった。調べ学習の発表形式の授業も行われ、これは反転学習の先取りともいえるが、鵜沼先生の授業でも「教材について自分で調べ、まとめて発表する訓練もあった」とあり、既に昭和初期に英和で行われていた形の踏襲でもあった。岡本先生は「……大学入試に備えないわけにもいかないので、どうしても知識を叩き込んだり、文章を理論的に理解把握させたりすることに時間をとられてしまう。それは不必要なことではないが国語の授業の一部であればいいので、本当は、国語の授業では、生徒の全人格を緊張させ、精神の眠っている部分を刺戟するような作業をしたいものだと思う」と目指す国語指導について述べている。

岡本先生の鵜沼先生への弔辞（前述）には「……先生はながい御在職の間、東洋英和の国語教育の中心であり、吉本〔てう〕先生と並んで、東洋英和の躾けの中心に居られました」とある。「まだ人格のまとまりもつかない扱いにくい年頃の私共に、先生は、本の読み方、文学の味わい方を教えて下さいました。先生のお話を面白くうかがい、先生の出され

創立70周年時の先生がた（1954年11月４日）
左から長浜ツネ／河野秀子／宮部黎子／鵜沼幸／岡本幸江／星野ミサヲ／小松明子／ダグラス（敬称略）

た問いに答えて居ります間に、私共のものを見る目も、考える心も育てられたのでした。先生はまた、立居振舞についても、たびたび御注意下さいました。先生のいましめは、若い気持には厳しく感じられましたが、その一つ一つが自分の性格の根本的な欠点につながるものであったことを、後になって思い知ったことでした。（中略）先生の感化で豊かに日々を暮している者、先生のいましめをいつも思い出して自分の行動を省みている者はどれほどの数になりますでしょうか」とあるが、この「先生」はそのまま「岡本先生」と読み替えることができる。鵜沼先生から岡本先生へ、豊かな人格形成をめざした英和の教育が引き継がれていった。

ミス・ハミルトン校長時代に在学し、鵜沼先生・長野先生の薫陶を受け、両先生の傍らで教員としても歩んだ者として、東洋英和の生命を伝え、退職後も英和を愛し続けた岡本先生の生涯であった。

町島　由美子（中高部国語科教諭・史料室委員）

### 岡本　幸江（おかもと・さちえ）先生
（旧姓 大多和）

—略　歴—

1919年2月12日　誕生
1936年3月　東洋英和女学校高等女学科卒業
1940年3月　東京女子大学国語専攻部卒業
1940年4月　東洋英和女学校嘱託
1943年3月　東洋永和女学校退職
1950年6月～　東洋英和女学院中高部講師
（その間、1952～1953年度
東洋英和女学院短期大学保育科講師）
1958年4月　東洋英和女学院中高部専任教諭に着任
1979年3月　同　退職
1981年9月～11月　同 非常勤講師
2014年1月16日　召天（94歳）

# 140年史の編纂がスタートしています

来年2024年に東洋英和女学院は創立140周年を迎えます。周年事業の一環として、学院では「140年史編纂委員会」を設置し、『東洋英和女学院120年史』以来20年ぶりとなる年史刊行の準備を進めています。
今回は、第２回140年史編纂委員会（2022年５月20日）の際に、監修者である水谷悟教授（静岡文化芸術大学）から編纂委員会のメンバーにお話しいただいた講話を紹介いたします。

## 東洋英和女学院にとっての年史編纂事業

**水谷 悟**

**水谷　悟　（みずたに・さとる）**
静岡文化芸術大学文化政策学部教授。専門：日本近現代史（思想史・メディア史）。博士（文学）【筑波大学】。単著：『雑誌『第三帝国』の思想運動－茅原華山と大正地方青年』（ぺりかん社、2015年）、共著：『カナダ婦人宣教師物語』（東洋英和女学院、2010年）ラージ執筆、中野目徹編『官僚制の思想史』（吉川弘文館、2020年）他。

### 監修者としての「使命」～「愛」と「義」

皆様、ごきげんよう。『140年史』の監修と「前史」の執筆を担当することになりました静岡文化芸術大学の水谷です。私は創立120周年となる2004年度から東洋英和女学院中高部の社会科専任教諭として12年間、さらに2013年度より東洋英和女学院大学の非常勤講師としてもお世話になってきましたので、年史編纂に尽力する機会をいただき光栄であると共に、重責に身の引き締まる思いです。

各部で責任を負っておられる委員の先生方に講話をするのは恐縮ですが、私に与えられた「使命」があるとすれば、それは東洋英和での教育経験を持ちつつ、日本近現代史を専門とし思想・文学結社、新聞・雑誌メディア、教会・学校・地域を対象に研究を進めてきた歴史学者としての歩みを評価していただいてのことだと思います。

お世話になってきた東洋英和には中高部を離れて余計に愛着が湧いています。各部の教育については先生方が日々「愛」をもって園児・児童・生徒・学生に接しておられる気持ちを軸にご執筆ください。ただし、聖書の神様は「愛」と「義」の両面をお持ちです。歴史学の立場から学院が時代や社会とどう向き合ってきたか、どのような位置づけが適切か、「義」をもって監修いたします。時に厳しい指摘をするかも知れませんが、『140年史』をよりよいものとしたい一心とお許しください。

### 年史の役割と『140年史』の位置

歴史は過去の蓄積である今日を映し出し、明日の生き方を考えるヒントとなる「鏡」のような存在です。教育機関にとっての年史とは、これまでの歩みを省みて現在地を確かめ、中・長期的な視点から教育の未来を照らしていく定期点検の役割を担っているのです。さらに学院に列なる一人ひとりの個性を発揮する「万華鏡」（2005年度・中高部楓祭のテーマ）のような輝きを形にできればと願っています。

さて、第１回の編纂委員会（2022年４月12日）記録を読みますと、『140年史』は『120年史』刊行後の最近20年の歴史を記録し、『150年史』という区切りにつなげていく「中間的な役割」を担うとあります。ですから、委員の皆様をはじめ学院に列なる皆様のご理解とご支援を賜りながら、『150年史』という「結実」に向けて「種蒔き」または「萌芽」の時となるよう基礎作業を積み重ねてまいります。

### 他校の年史事業と東洋英和の方向性

すでに東洋英和より歴史のある教育機関では『150年史』の編纂が進められています。2021年11月には青山学院史研究所開設記念シンポジウム「学校史・大学史研究の可能性」が開催されました。筑波・東京・慶應・早稲田の各大学から年史編纂を担当する教授が招かれ、編纂事業の課題と可能性、大学アーカイブズや政府の文教政策への点検の必要を説いています。各校の取り組みに学ぶ点は多いのですが、文学部や史学科を備え、史料に関する専門教育を施す制度を持つ一方、編まれた年史はややもすると専門家・研究者とそれをめざす院生・学生ばかりを対象とする「限られた年史」となってしまう懸念があります。

女子教育の中でも独自の道を選んできた東洋英和には、その歩みにふさわしい別の形があるのではないでしょうか。史料による実証を踏まえつつも英和らしさを大切にする内容と体裁にしたい。なぜなら幼稚園から小学部・中高部を経て大学・大学院に至るまで、一人の人間が成長していくプロセスに長く関わることのできる「縦」の総合教育機関＝生涯学習の拠点ならではの形があると考えるからです。たとえば、児童・生徒に英和の歴史を伝えるには史実として正しく、お話としても読みやすい文体や形式が求められるべきです。

### 『150年史』の構想と「TEA」の構築

最後に『140年史』の先にある『150年史』のイメージを共有する必要があるでしょう。構想の一端をお話しさせていただきますと、題して「みんなの年史」です。一部の専門家を対象とするのではなく、園児も児童も生徒も学生も院生も、教職員も保護者も卒業生も読みたくなる内容と形式を持つ年史にしたい。『東洋英和女学院百年史』は700頁を超える学術書でしたが、対して『150年史』は「東洋英和の校舎・校門・校章をモチーフにしたガーネットのBOXを開くと、学術的要件を満たした「年史」のほかに、幼稚園児向けの「絵本」と「英和カルタ」、小学部生向けの「教科書」と「英和生ゲーム」、中高部生の「記念文集」と合唱コンクールの歴代最優秀賞曲を収めたCD（または音源）、大学生の「卒論選集」とかえで祭やサークル等の様子を収めた映像が鑑賞できるURLが入っている。さらに紙媒体にとらわれず、専用ホームページを開設し、○○期生ごとに懐かしの映像や画像を楽しむことのできるパスワードを共有し、在校生・卒業生・教職員にもアイデアを募り、作成自体に参加してもらう。そんな「玩具箱のような年史」を創りたいと考えているのですが、いかがでしょうか。

費用の面では『140年史』刊行を通じて「150年史基金」を募ることはできないでしょうか。かつて野尻キャンプサイトのメインホールが卒業生の皆様の熱意で新築されたことに驚きと感動を覚えました。それ程ではなくとも、寄付してくださった方々には希望に応じて『150年史』1BOXを贈呈させていただく。そうすれば、東洋英和が築いてきた教育とそこで成長した園児・児童・生徒・学生たちのしなやかで逞しい姿が記録され、広く語り継がれていく好機となるに違いありません。

こうした構想を実現するには可能な限り学院関係の史料を収集・整理・読解し、『150年史』を計画的に執筆していく必要があります。そこで下記の三つの柱で「東洋英和女学院アーカイブズ（TEA）」を構築したいと考えています。皆様方のご理解とご協力を心よりお願い申し上げます。

①史料室の保管する学院関係資料を整理・読解・データ化する。

②学外機関で史料を調査・収集する。

③学院関係者・卒業生・在校生にヒアリング調査を実施する。

**『東洋英和女学院140年史』は2024年10月の刊行を予定しております**

## 140年史編纂委員会

委員長　　髙橋　貞二郎（副院長）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 大　学 | 池田　明史（前学長・学事顧問） | 法人事務局 | 吉田　豊　（総務企画部長） |
| | 望月　敏弘（国際社会学部教授） | | 松本　郁子（史料室） |
| 中高部 | 柿野　滋子（中学部教頭） | | 三笠　知世（史料室） |
| 小学部 | 山本　香織（前小学部長） | 陪　席 | 青山　史絵（大学図書館事務長） |
| 幼稚園 | 堤　加壽美（東洋英和幼稚園園長） | 陪　席〈事務局補助〉 | |
| かえで幼稚園 | 大瀧　知子（かえで幼稚園園長） | | 田原　綾子（総務企画部） |

＊監　修　　水谷　悟　（静岡文化芸術大学教授）

第７回　140年史編纂委員会（2023年３月22日）の様子

## 展示コーナーご案内

◆村岡花子文庫展示コーナー企画展

### 邦訳　『赤毛のアン』70周年―村岡花子と「赤毛のアンをめぐる人々」―

東洋英和の卒業生であり、翻訳家・児童文学作家として知られる村岡花子が翻訳した『赤毛のアン』が刊行されてから、昨年2022年で70年になりました。今回の展示では70年の間に刊行されたさまざまな『赤毛のアン』を紹介するとともに、村岡花子とアン・シリーズをめぐる人々との交流を紹介していきます。

会期：2023年７月29日（土）まで

◆学院資料展示コーナー企画展

### 東洋英和の周年記念―創立25周年から現在まで―

来年2024年に学院創立140周年を迎えるにあたり、過去の東洋英和の周年事業にまつわる資料を展示いたします。懐かしい記念品などが勢ぞろいします。

会期：2024年12月21日（土）まで

入 場 料：無料　どなたでもご自由にご覧いただけます。
展示場所：東洋英和女学院　六本木校地　本部・大学院棟１階
公開時間：日曜日・祝日・長期休暇以外の９：00～20：00
（土曜日は９：00～19：00）
※館内の洗面室はご使用いただけません。／団体でのご見学の場合は、予めお知らせください。

## 利用統計（2022年10月～2023年３月）

| | | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 展示見学者数 | | 100 | 74 | 50 | 56 | 51 | 78 |
| 展示見学者区分 | 学内関係者 | 23 | 23 | 9 | 18 | 21 | 25 |
| | 一般 | 77 | 51 | 41 | 38 | 30 | 53 |
| | | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| 資料閲覧者数（累計） | | 12 | 8 | 5 | 7 | 12 | 10 |
| 閲覧者区分 | 本学学生・生徒 | | | | | | |
| | 現教職員 | 5 | 2 | 3 | 1 | 3 | 4 |
| | 旧教職員 | | | | 2 | | 1 |
| | 同窓生・学院関係者 | 7 | 4 | 2 | 2 | 5 | 2 |
| | 同窓生（研究者） | | | | | | |
| | 他校研究者・学生 | | | | | 4 | 1 |
| | 一般 | | 2 | | 2 | | 2 |
| 利用の目的 | 年史編集 | | | | | 4 | 4 |
| | 著述・論文作成 | | | 2 | | | 1 |
| | 伝記資料調査 | 1 | 4 | | 3 | | 1 |
| | 記録類の調査・研究 | 5 | 1 | 1 | 2 | 4 | 2 |
| | 学院広報関係 | 1 | 1 | 1 | | | 1 |
| | その他 | 5 | 2 | 1 | 2 | 4 | 1 |
| 資料の種類（重複あり） | 東洋英和関係 | 11 | 7 | 5 | 4 | 12 | 10 |
| | カナダの教会関係 | | 1 | | 1 | | 2 |
| | 村岡花子関係 | 1 | 1 | | 2 | 2 | 3 |
| | 周辺地域史 | | | | | | 1 |
| | その他 | 1 | | | 1 | | |
| | | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
| 月別レファレンス件数 | | 28 | 10 | 6 | 8 | 15 | 16 |
| 質問者の区分 | 本学学生・生徒 | | | | | | |
| | 現教職員 | 12 | 6 | 2 | 4 | 6 | 6 |
| | 旧教職員 | | | | | | 1 |
| | 同窓生・学院関係者 | 4 | 1 | 1 | 1 | 4 | 2 |
| | 同窓生（研究者） | | | | | | |
| | 外部研究者・学生 | 9 | | 3 | 2 | 2 | 5 |
| | 外部研究機関 | | | | | 1 | 1 |
| | 一般 | 3 | 3 | | 1 | 2 | 1 |
| 質問内容（重複あり） | 資料所蔵調査 | 11 | 1 | 3 | 3 | 7 | 2 |
| | 写真所蔵調査 | 2 | 1 | 1 | 1 | | 1 |
| | 事項調査 | 22 | 7 | 3 | 4 | 6 | 8 |
| | その他 | 1 | 1 | 2 | 1 | 5 | 5 |

## 史料室の活動より（2022年10月～2023年３月）

（☆は複数回）

**2022年10月**

☆140年史関連―年表データ作成・校正、資料編用データ作成、ページ構成協議、入稿前原稿校正ほか
・照会―港区麻布地区総合支所協働推進課より、パイプオルガン関連記事について
・照会―中学部長より、創立記念日が11月６日であることについて→Missionary Outlook/「敬和会」資料を紹介
・照会―高等部長より、追悼記念日が設定されていくまでの過程について→初期スクラッププブック資料を紹介
・全国大学史資料協議会総会（オンライン参加。松本・三笠）
・11日　NHK札幌「辻村もと子」特集放映（村岡花子関連、取材協力）
☆村岡花子文庫展示コーナー企画展準備・展示替え
・調査―村岡花子の入学年齢について再調査。「10歳」で確定
・21日　第５回　140年史編纂委員会
・来室／調査―中学部教頭。クリスマス音楽会について
・照会―大学教員より、大学の礼拝堂の成り立ち、パイプオルガン設置について

**2022年11月**

☆校正―楓美会ホームページ、「楓園」、学院同窓会作成「同窓会の歴史」年表ほか
☆今後予定される大学での歴史展示について、大学教員、大学総務課と協議
・校正―「MOE」１月号 邦訳「赤毛のアン」70周年展記事
・「史料室だより」No.100「東洋英和の先生がた」のため、岡本幸江先生についての座談会
☆来室／調査―ヴォーリズ研究家。ヴォーリズ、ヘニガー夫妻について。関連資料を複数ご寄贈いただく

**2022年12月**

・140年史のため、歴代学院同窓会長座談会
・５日　第６回　140年史編纂委員会
・来室／調査―2022年高等部卒　大学生。大学の授業発表のためヴォーリズについて
・14日　第５回　カートメルセンター検討委員会（松本）
・2022年度　史料室資産照合作業

**2023年１月**

☆子ども140年史関連―制作会社打ち合わせ、入稿前原稿校正ほか
☆執筆・編集・校正―「史料室だより」No.100
・照会―総務企画部より、旧ヴォーリズ校舎の十字架モチーフについて
・照会―中高部教員より、スクールカラーのガーネットとゴールドには、象徴的な意味があるのか？→参考となる史料は現時点では無し
・来室／調査―新宿歴史博物館。林芙美子から村岡花子宛の詩稿を撮影、調査
・来室―中高部地歴部メンバー。史料についてのレクチャーの後、史料室、展示コーナーを見学
☆資料整理―書庫狭隘のため大幅に資料を移動
・20日　第３回　史料室委員会
☆校正―「大学案内」2024年度版のうち歴史ページ
・相談―大学図書館と大学図書館所蔵の旧宣教師所蔵本の選出と今後の保管・活用について
・照会―学外研究者より、米内光政息女、米内中子（卒業生）について

**2023年２月**

・来室／調査―小学部母の会役員。母の会、父の会の歴史に

ついて
☆資料整理―移管資料の仕分け
・来室／調査―東京家政学院大学創立100周年記念誌編纂室。東京家政学院創立者であり、東洋英和卒業生・教員・同窓会会長だった大江スミについて
・照会―山梨日日新聞より、関東大震災時の東洋英和は？→加茂令子「思ひ出の9月1日」『東洋英和女学校五十年史』を紹介
☆大学2023年度フレッシュマンセミナーについて大学教員と相談
・展示案内―女子美術大学歴史資料室。 展示コーナーリニューアルの参考とするため
☆大学2023年度「東洋英和の歴史」講義シラバスのうち史料室担当回について検討、確認
・照会―副院長より、卒業生の翻訳家でキリスト教関連の翻訳書がある方々について→リストを作成
・研修―国立女性教育会館「女性アーカイブ研修」（オンライン参加。松本・三笠）
・取材―短期大学保育科卒業生より「筑豊の子供を守る会」キャラバン参加、しおん園を立ち上げた経緯などをうかがう。資料も複数お借りする
・校正―中高部「学校案内」歴史ページ
・照会―現在の中高部のメモリアルチャペルの窓枠、椅子、ドアノブは旧校舎のものか？→当時建築委員会メンバーの内藤達先生と楠山高等部長より旧校舎のものであると確認
・来室―故伊勢紀美子大学教授蔵書の大学院図書室へのご寄贈の際、ご親族が史料室にもお立ち寄りくださる

**2023年３月**
・来室／調査―学外研究者。ヴォーリズについて。『鳥居坂わが学び舎』などを閲覧
・8日　第6回　カートメルセンター検討委員会（松本）
☆展示のため、周年記念品類整理
☆学院資料展示コーナー企画展準備・展示替え
☆「筑豊の子供を守る会」関連画像をスキャン、資料整理
☆幼稚園と小学部の現在の土地・建物の記録作成について、史料室委員内で検討、学院運営協議会へ提議
・照会―副院長より、桜プロジェクトの概要について
・22日　第7回　140年史編纂委員会
・キ同盟関東地区大学部会研究集会に参加（松本・三笠）旧統一協会脱会者のために奉仕されていた故川崎経子牧師（1948年高等部卒）の活動に言及あり

**【おもな移管資料】**
・中高部聖書科より、「コイノニア」 バックナンバー、YWCA関係資料
・中高部より、体育祭ポスター大型２枚
・高等部長より、2012年高等部卒業学年の学年会資料冊子・プログラム
・中高部英語科より、1913年版の英語教科書『オンタリオ・リーダーズ』、中高部オリジナル教科書、ロジャース先生のノート類ほか
・中高部生徒会室より、生徒会関連資料（段ボール１箱）

**【おもな受贈資料】**
・伊東美香子氏（元中高部聖書科奥興先生ご息女） より、1953年の写真アルバム、「コイノニア」ほか複数
・「第五十三回保育証書授与式順序」、「第九十三回卒業証書授与式次第」ほか
・黒川信也元高等部長より、長野彌先生関連資料①「一、学院規模の現況と将来の構想」ほかプリント（昭和32年12月下旬）／②長野彌先生追悼式（1983年２月26日）の際の黒川先生による「追悼の言葉」原稿ほか
・元中高部国語科　茂木啓子先生より、「高三修養会」1990年／2000年、「北海道修学旅行しおり」1965年／1999年ほか広報物多数
・記念品風呂敷、リング３点、ネックレス、バッジ、文鎮２点（小学部卒業記念、創立90周年）、楽譜６点、文集（1969年６年２組）「荷乃苦路」ほか
・『讃美歌　第二編』教文館、明治42年（大正５年東洋英和女学校卒業の普賢寺輝子（旧姓：今村）氏旧蔵本）／広報「わがまち新井宿」第87号（村岡花子関連）ほか
・楓シルバーペンダントトップ、リング２種、校章入り革製筆箱と刻印入り鉛筆、校章入り革製定期入れほか
・ヴォーリズ学園より、100周年記念史、周年記念品
・中高部国語科　町島由美子先生より、野尻Newsletterの原稿資料、岡本幸江先生の写真（一時借用）、元小学部教頭稲葉一彦先生が同窓会で配った戦争年表と沖縄巡礼のプリント
・元中高部英語科　奈良みどり先生より、ミス・グリンバンク、安井てつ写真ほか
・中高部　内田契以子先生より、柳原白蓮色紙、「答辞　小学部」（昭和25年）、「祝辞　高等部」（昭和30年）原稿
・戦時中に学校の制服でなく着せられた婦人服の胸ポケットに縫いつけた刺繍の校章（２点）

**（書籍・雑誌・論文）**
・小磯（旧姓：森本）英津子氏（1986年高等部卒）翻訳、J. D. クロッサン著『最も偉大な祈り』日本キリスト教団出版局、2022年
・朝日新聞自分史事務局中村謙氏より、渡辺允『思い出の記その一』（取材協力。渡辺允元侍従長は小学生の時にミス・ハミルトンに英語を習っている）
・芝恭子（本学名誉教授）「追悼　松岡享子「幸い」の学び舎」所収『こどもとしょかん』2022秋175号
・伊勢田奈緒大学宗教部長より、自著『初期宗教改革運動の諸相』日本評論社、2022年
・元中高部英語科　雨宮美枝子先生より、雨宮栄一『反ナチ抵抗運動とモルトケ伯　クライザウ・サークルの軌跡』新教出版社、2022年
・内田克彦氏より、「大河ドラマ・朝ドラから、鳥取のゆかりを探してみた（一）」所収、鳥取市尚徳大学『年輪』48号、2022年11月（調査協力）
・作間和子氏より論文掲載書籍①*The Journal of L. M. Montgomery Studies*（調査協力、 画像提供） ／②*L. M. Montgomery and Gender* ／ ③*Reflections on our Relationships with Anne of Green Gables*
・村岡美枝氏より、文：ポール・ハーブリッジ／絵：マット・ジェームス／訳：むらおかみえ『つきよのアイスホッケー』福音館書店、2023年
・永田早苗氏より、『これがわたしの生きる道！伝記　日本の女性たち2』汐文社、2023年（広岡浅子と村岡花子の画像提供）
・かえで幼稚園坂井衣子氏より、砧教会会報「砧だより」97号コピー（岡本幸江先生追悼文掲載）
・『港区教育史』くらしと教育編、2023年（調査協力）
・押川理佐氏（1989年高等部卒・1993年大学卒）より、自著『ほしのともだち　ぴりん』世界文化社、2018年ほか

**【おもな画像提供】**
・卒業生に、各学年会のため画像18点／29点／24点
・中学部に、村岡花子画像１点、長岡輝子画像４点
・山梨日日新聞社史のため、野口ふみ／ブラックモア／村岡花子画像３点
・東京家政学院大学に、大江スミ関係画像24点

**既刊の「史料室だより」もホームページでお読みになれます**

「史料室だより」は全号、学院ホームページで閲覧できます。「東洋英和 史料室だより」で検索、または下記のURLよりアクセスしてください。東洋英和の歴史が満載です。

URL: https://www.toyoeiwa.ac.jp/archives/publications/

**資料ご寄贈のお願い**

史料室では、学院の歴史や学校生活の様子を伝える資料、写真、記念品等を収集しています。お手許にあってご不要のものがございましたら、ご寄贈いただけると幸いです。また、卒業生および教員の方々の著作も収集しています。

【お問い合せ先】 東洋英和女学院史料室　〒106-8507　東京都港区六本木5-14-40
Tel　03-3583-3166（直通）　Fax　03-3583-3329　E-mail　archive@toyoeiwa.ac.jp